
夢幻の城と君の夢

はるいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻の城と君の夢

【Nコード】

N0591M

【作者名】

はるいち

【あらすじ】

あらゆるものに飽きた人類。全てが麻痺した儚い世界。ちっぽけな大人と小さな子がその先に辿り着いた、もの。

夢幻の城

『さてさて！今夜の逃走劇はどーなるのかなっ！？』

けたたましいサイレンと共に、少女のような甲高い声が響き渡り、奇抜な恰好をした少女のディスプレイが都市じゅうに溢れ出す。

『きょーのスタートはあー……おおっと逃げたねえ、——エリア35の東ゲートだっ！』

きゅーん、きゅーん、と後ろの大きな地図の一部が光り、その『エリア35』と描かれた部分が地図いっぱい広がる。

『ここは難攻かな！？なんてったって、エリア35はみんなが住んでるエリアの5倍もある大倉庫帯だからね！』

ぴこんぴこん、今度は、エリア7と描かれた一部が、パズルのピースのようにエリア35の中に入る。確かに、エリア35が遥かに大きかった。

『じゃあ！今回の逃走劇のおさらいだよ！』

ぱっちんとウイंकを決めると、画面が完全に切り替わる。

『まず逃走人は2人！ロネット・アンディオ29歳、エリア38の機械工さんだね！そして彼のお供、ユリアナ・エイミー7歳！やっぱりユリアナちゃんに関する情報はまだ上がってないの！ごめーんね！』

画面を二分して映るのは、精悍な顔立ちながらも不精髭にぼさぼさ頭、こけた頬の男と、しろい肌の、澄んだ大きな瞳をもつ、人形のような綺麗な女の子。

『で！追跡人はやっぱりこの人っエンセイ・ロジャー119歳！エリア8の第一学院博士号のエリート警官！これまでの戦績はなanan

と！ってまあ皆知ってるだろうけど、28戦全勝！無敗の追跡マスターは、今日はエリア16からのスタートでっす！」

今度は画面左半分に凛々しく冷たい印象の男。整った顔立ちは無表情で、制服を着て前を睨んでいる。右半分は再び全体地図に戻り、エリア16を赤く点滅させている。エリア35との距離は遠めだ。

『ハ―イ！そしてそしてえ！今日も1日、いや半日だったごめん！頑張っちゃいますこのワタシ！』

きらきらと流星群が画面にながれ、さきほどの少女が再びうつる。

『世界を股にかけるマルチ・マスメディア・マスター略してMMM2年目とつにゅー！ハイパーDJこと、』

そこで少女がカメラに顔を向けた。画面にばっちりとうィンクをする少女。

『りっつんでーす！！』

両手のピースサインと共に、また画面から星が溢れ出す。

ひとしきりファンサービスを終えると、また自らのモニタに目線に戻した。

『さて、じゃあ早速カウントダウンしますよ！スタートまで10！9！』

画面もカウントダウンにうつりかわり、地図は小さく右下にやられた。

シンプルな数字がひとつずつ、ひとつずつ消えるようにして、減っていく。

『3！2！1！！』

少しずつ光を吸収して、1のカウントと同時に画面が真っ白になる。

次の瞬間。

『すたーーーーーとっ!!』

りーんごーん、どこから鐘が鳴る。

今宵も空しい鬼ごっこが、はじまった。

選手入場

それは、小さな世界の終りの、はじまりの夜。

こん、こん。規則的で、さびた機械のようなゆったりしたノック。やたら水っぽいドリンクで空腹を満たしていたその小屋の住人たちは、ぴくりとその手を止めた。

ぎゅっ、と、小さな少女は表情を変えぬまま、手元の小汚いぬいぐるみを抱きしめる。

「ユリ、ここを動いてはいけない。俺が見てくる」

「……うん」

俯いて、どこか不安そうに声を絞り出す小さな女の子の髪の毛をくしゃりと一なですると、カップをテーブルに置いて立ち上がる。ことりという音が、やけに大きく響いた。

こん、こん。再びノックがなり、返事をしてノブを握ったところで、薄い板で作られたドアの向こうから息を吸う音がした。

「夜分に済まない。『国家統制局』の者だ」

「……はあ、」

厄介な、と男は思った。名前こそ仰々しいが、実態はメディア界を独占する国営の情報局だ。あらゆる伝播技術、それすらを超越したテクノロジーを一集させ、日々人々の娯楽のために奔走している。

「……唐突ですまない。今回の『逃走人』が、貴方に決定した」

ドアを開けた先の男は淡々と言った。帽子を取り、機械的な声とは裏腹に、寂しそうな、白髪混じりの上品な初老の男であった。

「……はあ。あの、逃げるあれか」

「ご存知か、なら話は早い……。ルールの全容は」

「いや、そこまでは」

男はどこまでも寂しそうだった。

「そうか……。本当に済まない、ロネット・アンディオ君。大切な

話だ、どうか聞いてくれ」

「ああ」

そして夜が更け、日は進んでいく。

ちっぽけな2人は『スタート地点』に連れられた。幼子にとっては、最初の遠出。人形のような容貌にも朱が差し、窓に手をついて身を乗り出している。彼女の体を支えつつ、男もどこか、嬉しいような顔をした。

「……ロネ、あれは？」

「『空の樹』だ。国一帯を見渡せるらしい」

「その横にある、あの赤い……」

「ああ、俺の参加する『ゲーム』の主催局の、『旧電波塔』だ。出来た当時は、国一番の高さだったんだ」

「あんなに、小さくなったの？」

「いや、小さくなったんじゃない。周りが大きく、高くなったんだ」

「ふうん……」

「ロネット君。そろそろ到着だ……安全装置を」

助手席に座っていたのは、かの老人。ロネットはユリを座席に座らせた。

「はい。さあユリも、そろそろ着くから、安全装置を着けるぞ」

「うん。……ロネ」

大人しくされるがままになっている彼女が、顔だけをこちらへ向けた。

「うん？」

「お出かけ、初めて。だから、ユリはうれしい。ロネは？」

「……ああ、俺も嬉しい。お前と遠出するのは初めてだもんな」

優しい顔で、2人は微笑む。ユリアナが照れたように、また外へと視線を向けた。

「うん。ここは、こんなに広いの。すごいね」

「そうだな。さあ、あれがスタート地点だ」

幼子は彼が指差す方を見て、なにやら口の中で呟いた。視線の先の、一面の黒。

「常光灯は一つもないらしい。さあユリ、これは逃げる側にとってはとても不利か？」

おどけたように、彼は幼子に微笑んだ。彼女は理知的な目を傾げて、少し考えたふうにして。

「うん。だって、どこに行ったかすぐにわかってしまうもの」

常光灯はない。つまりは、歩けばそれを感知して灯りがともる。それは自ら、足跡を残していくようなものだ。

きっぱりと、何事もないように答えるから、彼は満足そうに笑う。

「正解。なら、どうすれば有利になる？」

そうして今度は、もう少し意地悪そうに聞いた。これには、彼女も難しい顔をした。

「……光が点く前に、にげる？」

「惜しい。まあそれも正解さ、それもひとつの手だ」

どこか不服そうな彼女の頭にぽんと手を置く。そうしたら、老人が、遠慮がちに言った。

「間もなく到着です」

「ああ、はい」

「ロネ、答えは？」

「うん？ ああ、」

間もなく、という言葉どおり、十数秒でエンジンが落ちる音がした。

「あと10秒で地上です。ご準備を」

きゅううん、という浮遊システムが作動し、地面に着陸態勢を取る。中々の轟音の中、彼は着地の態勢を取りながら、腕の中に抱える子の耳に口を寄せた。

「答えは簡単さ、」

——全ての灯りを、ともる前に壊してしまえばいい。

彼もまた、ひとつの終りの、はじまりだったのかも知れない。

「ロジャー君、『お仕事』ですよ」

「またですか」

温和そうな、アンティークのグラスを掛けた男が、薄い資料の束を青年に手渡した。

「ええ、『統制局』も何を考えているんですかねえ」

「何も考えていないんでしょう。皆麻痺してるんですよ、神経が」
そう切り捨てながら、与えられた『指令』と『ターゲット』に関する書類をざっと流し見る。

「皆、ですか」

「そう、皆です。貴方も――俺も」

面白くなさそうに、彼はそれらを適当な机の上に置くと、踵を返してしまった。

「ロジャー君？」

「『ミッション』のスタートは1週間後です。せいぜいファンサー
ビスでもしないと怒られますからね」

体作りの最終チェックでもしてきます、と、彼は上着を脱いで男を見やる。

「それはまた。『統制局』も大きくなったものですねえ」

「全くですね。ああ隊長、この仕事が終わったら、少し休暇が欲しいんですが」

隊長、と呼ばれた彼は、ロジャーの聞きなれたその言葉にまた微笑んだ。

「ああ、はい。わかってますよ、3日間ですね。申請、こちらで出しておきますから」

「ありがとうございます。……じゃあ、お先に」

上着を抱え、上司と別れた彼は、真っ直ぐ機能訓練塔へと向かって行った。

そうして、何とも無い日が過ぎて。

「……では、行って参ります」

「うむ、健闘を祈る」

通過儀礼のような、2人のみの出発式。敬礼を戻すと、ロジャーは少しだけ表情を変えた。

「……隊長」

「うん？」

「今日は——良い夜ですね」

空は一面が美しい星。ガラス張りの部屋から見下ろす街は、随分遠くにぼんやり、灯りが瞬いている。

彼に言われて、隊長も体を外に向ける。確かに、今日は一段と澄んでいた。雲も少なく、人工衛星も見当たらない。

「ええ、そうですね」

「下とは比べ物にならない」

どこか嘲笑うような彼の言葉を、隊長はあえて、気付かない振りをした。

「気分が晴れたようで良かった。気をつけなさい」
ただただ優しそうにそう言って、彼を送り出す。

「はい、失礼します」

踵を返して歩き出したが、少し行ったところで立ち止まり、小さく、帽子の鍰を掴んで微笑んだ。

——行って、きます。

電波塔は、彼らを待ちわびるかのように、一際大きく輝いて、毅然と都市に立ち尽くしていた。

もうすぐ、スタートの鐘になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591m/>

夢幻の城と君の夢

2010年10月11日00時09分発行